論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　神山　歩未

論　文　題　目

「伝統」・移住・文化再創造
—現代のマオリタンガ—

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	佐々木　重洋
委員	名古屋大学教授	阿部　泰郎
委員	名古屋大学教授	周藤　芳幸
委員	名古屋大学准教授	東　賢太朗

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

【本論文の概要】

本論文は、ニュージーランド都市部在住の先住民マオリの文化実践をめぐる民族誌的記述と分析から、マオリタンガ（*Māoritanga*）を批判的に再検討するとともに、先住民の文化的独自性と権利の主張に関わる戦略的本質主義とアイデンティティ・ポリティクスの問題点を論じたものである。マオリタンガとは、「マオリらしさ」を幅広く包括する概念であり、ワイタンギ条約締結以降の白人入植者による植民地化と同化政策に対抗して、エリート・マオリによって本質主義的に構築されてきた歴史を持つ。

まず、第 1 章では、戦略的本質主義とアイデンティティ・ポリティクスをめぐる従来の議論をめぐって、主にマオリ学およびネイティヴ人類学の成果と課題が検討される。一部のエリート・マオリによる極端な本質主義化の議論がマオリ文化の多様性を否定し、エリート・マオリが偽物扱いする都市在住マオリなどが二重に周縁化される問題点が指摘され、これを乗り越える視座の獲得が本論文の課題として提示される。

第 2 章では、研究方法と調査地の概要が簡潔に述べられる。続く第 3 章ではマオリの歴史が概観され、現在のニュージーランドの地への移住、白人入植者との接触、ワイタンギ条約の締結、植民地化と白人主流社会による同化政策の推進、マオリによる文化復興運動の隆盛、エリート・マオリの出現とマオリ学の誕生など時系列に沿った記述とともに、マオリタンガが主張されるようになった歴史的経緯が示される。

第 4 章では、マオリタンガの中核のひとつであり、マオリの文化的アイデンティティの拠り所とされるマラエについて詳述される。マラエは、マオリがその出自を固有の土地と結びつけて把握し、祖先との関係性を維持するうえで重要な役割を果たす建築物であるとされてきたが、その建築物としての構造と文化的な意味づけも歴史の中で構築され、マオリの「伝統文化」として再創造されてきたことが明らかにされる。

第 5 章では、オークランド南部に位置するマヌカウ市の事例を中心に、都市在住のマオリたちの日常生活に関する詳細な民族誌的記述がおこなわれる。そして、都市在住マオリもまた、マラエにおける集会をとおして各自の祖先と固有の土地との関係性を維持していること、ただし都市のマラエは汎マオリ的性格を有し、個々の血縁集団を超越したマオリ意識の形成においても重要な役割を果たしていることが指摘される。

第 6 章では、資源管理をめぐる権利回復運動の事例が取り上げられ、世界的な環境保護運動と連動したマオリタンガの新しい展開として検討される。土地の先住者として、そして自然資源の保護者としてのマオリの権利を主張するために、土地の守護者とされる超自然的な生物への言及が活発化し、これらが資源管理法の制定と改正に有効であったこと、こうした権利回復運動がさらに活発化しつつある背景が分析される。

第 7 章では冒頭の問題提起に即した考察がおこなわれる。そして終章では、権利主張者としてのマオリの政治的立場を弱めることなく、戦略的本質主義がもたらし得る弊害を乗り越えるうえで、多配列思考が一定の有効性を持つと結論づけられる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

【本論文の評価】

ニュージーランドにおけるポリネシア系の先住民マオリ（Māori）は、そもそも 18 世紀以降に同地に侵入してきたパケハ（「白人」）との対比で概念化された民族集団であり、その後の植民地化と同化政策の過程で人口の激減と伝統文化の消失危機に直面し、早くから文化復興と権利回復に取り組んできた歴史を持つ。マオリを対象とした人類学の分野においても、植民地主義批判と調査倫理の問題をめぐる議論がいち早く先鋭化した。現在、調査研究の遂行に際してはさまざまな制約があり、しかも、その成果はネイティヴ人類学者と先住民運動家による厳しい視線に絶えずさらされている。

本論文は、調査研究を取り巻くこのような特有の環境の中、都市在住マオリおよびマオリ人研究者、マオリ学の関係機関と長期間にわたる親密な相互交渉を継続し、現在の都市在住マオリの文化実践を詳細に記述、分析することに成功している。その際、一貫して戦略的本質主義とは一定の距離を保ち、マオリの伝統文化の真正性をめぐる二項対立的な図式に回収されない論述を展開することができており、本論文はまず、現代の都市在住マオリに関する民族誌的報告としての資料的価値を有している。

また、マオリの文化的アイデンティティの拠り所のひとつとされるマラエに関して、関連する資史料を丹念に検討し、これがもとは建築物ではなく場所や土地を指す語に由来しており、キリスト教の教会建築との習合によって次第にマオリの「伝統文化」として再創造されてきた可能性を指摘しているが、これは注目すべき成果である。この議論は、1990 年代以降、オセアニア地域を対象とした人類学において盛んになった「絡まり合う」文化論、あるいは「カストム論」に位置づけることができるが、今後、伝統の再創造論だけでなく、キリスト教の布教にともなう文化変容と宗教混交、それらに関連する物質文化の再編成をめぐる議論にも展開し得る理論的射程も備えている。

さらに論者が、地熱資源利用施設などの建設にマオリが異議を唱え、土地在来の守護者とされる超自然的な生物を自然資源の「本来の」保護者と位置づけて土地の権利を取り戻そうとしている事例を、世界的な環境保護運動の高まりと連動させた新たなマオリタンガの実践として分析している点も評価に値する。この分析内容は、世界中で複雑化している先住民運動における最新の争点を読み解くうえでも示唆に富む。

ただし、本論文には課題も残されている。考察と結論の内容は妥当であるが、戦略的本質主義とアイデンティティ・ポリティクスによる袋小路を脱する鍵として提示された多配列思考についての概念的検討は必ずしも十分ではない。また、本論文の主旨からみれば当然の帰結ともいえるが、文化をめぐる政治学の主題とされない類の文化実践への言及をはじめ、民族誌としての包括性には物足りなさが残る。とはいえ、これらはいずれも、今後の研究の進展によってその克服が十分に期待されるものである。

以上により、審査委員一同は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。